

CiRA

Newsletter

vol.45
2021.04

COVID-19

特集 **新型コロナウイルスに立ち向かう研究者たち**

P.6 CiRA研究者の想い
大きな挑戦は、
大きな安心から始まる

P.8 社会に広がる iPS 細胞
価値ある iPS 細胞を、誰もが
利用できるようにする事業

P.10 倫理の窓から
対話ができるということ

ETHICS

倫理の窓から

対話ができるということ

中学生向け出前授業と、
小学生向けの「こどものための哲学」での経験から、
安心して発言できる空間づくりの重要性に
あらためて気がつきました。



文・鈴木 美香
上廣倫理研究部門特定研究員



CIRAの正面玄関横の芝生に咲く
ねじばな。DNAのらせん構造を
思い出すのは私だけ？



CIRAの4階と5階のオープンラボを
つなぐのは、らせん階段です。

上 廣倫理研究部門では年に一度、中学生向けに出前授業の機会があります（去年は遠隔での実施）。授業では、iPS細胞に関する科学的な基礎知識に加え、倫理的課題の代表例を紹介した上で、対話の時間を設けます。対話の課題は、「iPS細胞の作製に必要な血液を提供する立場」と「その血液を利用して研究する立場」を想像し、どんなことが気になるか、どんなことに配慮したらよいか考えるもの。なじみのない立場を想像する課題でしたが、班に分かれての対話を通じ「立場を変えて、多角的にものごとを考える」ことの重要性は伝わったようでした。しかし、班での対話スムーズに進んだのは、学校生活という日常の中に、自分の意見を安心して発言できる環境が整っていたからではないかと思に至りました。

そんなとき、主に小学生を対象にした「こどものための哲学（Philosophy for Children：略称 P4C）」を地域で実践するというので声をかけられ、ファシリテーターを引き受けました（こちらも遠隔での実施）。P4Cでは、子どもたちがそのとき話したいと思う「問い」を出し合い、多数決で一つの「問い」を選びます。子どもたちにとって「旬な問い」を、子どもたち自身が選ぶことに大きな意味があります。もう一つ大切なのが、安心

して発言できる空間をつくること。そのための工夫がいくつもあります。一つは、コミュニティーボールです。このボールを持っている人に、発言する権利／しない権利、そして次の発言者を決める権利があります。ボールを持たない人はみな、静かに耳を傾けます。もう一つの工夫は、対話のルール。特に大事だと思うのは、「相手の意見を否定しない」というもの。自分の意見と異なる場合もまずは受け止め、「どうしてそう考えるのか」を共有します。

子どもたちは疑問や意見を素直に発し、他の子の返答に刺激を受け、さらに考えます。異なる意見やその理由を共有しながら、自分の意見が変わっていくことを楽しんでいるようでした。ボールを回し、対話を重ね、自分の言葉で表現することで、実感の伴う気づきがそこにはありました。

これらの体験からあらためて感じたこと、それは、多様な価値観を持つ人が安心して対話ができる空間をつくり、否定ではなく理由を共有しながら思考を深めることの大切さです。そして、意見が異なることを前提とした対話を重ねることで、一人ではなし得ないような解決策を模索していきたいということです。

らせん階段を一步一步登るように。